

地元の砂鉄使い製鉄、鑄造

一関・大原小6年

産地水沢で作業体験

完成品は卒業記念に



職人の作業に興味津々の大原小学校の児童たち

一関市立大原小学校(弘川恒明校長)の6年生たちは20日、水沢区羽田町の市鑄物技術交流センターで、児童たち自ら製造した鉄を材料に、鑄物で同校の校章を作った。卒業を間近に控える児童たちは、中学校に進学しても友達との絆は変わらないとの思いを作品に込めながら作業を体験。完成品は卒業記念品にする。

同校では学校行事の一環で地元を流れる砂鉄川から採取した砂鉄を使い、「たたら製鉄」と呼ばれる技法を用いた鉄作りに取り組んでおり、来年度で20周年を迎える。これまでは鉄の塊を作って終わりだったが、同校児童の父母と同区羽田町の及源鑄造(株)(及川久仁子社長)が取引関係にあったことが縁となり、今回の作業が実現。学校伝統の行事をス

テップアップさせた。鉄を流し込む鑄型には、同校の校章をデザイン。「中学校に進学し、離れ離れになっても友達のままでいよう」との思いを込め、6年の小野寺望友さん(11)のアイデアを反映させた。同センターで行われた作業には6年生31人が参加。鑄物職人たちによる一連の作業も見学した。たたら製鉄で作った

鉄は「ケラ」と呼ばれる。この日は、ケラを高温度で溶解させ銑鉄と砂鉄を混ぜたものを鑄型に流し込んだ。児童たちは職人たちの手元に集中し、一つ一つの動作に興味深げに観察していた。

児童たちにたたら製鉄の技法を指導してきた「ホッパの会」(勝部昌平会長)の勝部欣一事務局長(72)は「製鉄から鑄造までの流れを間近にする貴重な体験ができたと思う。来年度以降も水沢で鑄造体験が続けられたら」と今後の展開に期待していた。

デザインを担当した小野寺さんは「鉄を溶かす時に火花が散るのに驚いた」と振り返り「卒業しても6年間の絆は変わらない。完成した鑄物が届くのが楽しみです」と笑顔を広げていた。この日作った鑄物は砂を落とすなどの仕上げを行い、今月中には児童たちの手元に届けられるという。